がっこうぐらし！　日常と非日常

空の青

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

がっこうぐらしに男主人公をプラスした話。

目次

一 …… 1
二 …… 6

一

学生生活において輝かしい思い出を作るにはどうすればよいか。
友人を作る、それが第一歩であろう。
その一歩を踏み外したものには、マリアナ海溝よりも深く暗い恐ろしい未来が待っているのである。そこでは常人は一瞬たりとも耐えること敵わず発狂し、「まんどりもんどり」と素っ頓狂なことを発しながら実体のない何かから逃げ回る羽目になる。
そうなってしまった戦友を、俺は何度も目にしてきた。そのたびに思った、こうはなるまい、と。
回避するにはどうすればよいか。簡単である。
「周囲と迎合せず己を貫き、何があっても動じない強い精神を持てばいいのです。その点、丈槍、お前はいい線いってるぞ。俺が保証する」
「わーい！」
「もう、そんなことで喜ばないの」
放課後の教室には三人の人影があった。問題児として名高い俺と丈槍、そして現国教師の佐倉さんである。
「でも、お友達がいた方が楽しいでしょ？　折角の学生生活なのよ？」
「甘いですな。俺は理解しているのですよ。集団行動には致命的に向いていないと言うことをね」
「そうだそうだー」
隣に座る丈槍に目を配れば、にこにこと腕を伸ばしている。楽しんでやがった。弁解するのは決まって俺なので、こいつにとってはちょっとスリリングなおしゃべり位の認識なのだろう。
俺の視線に気づいた丈槍が首を傾げた。
「なにー？」
「お気楽ものめ」
デコピンをしてやった。「うにゃ!?」と奇声を上げて額を押さえると、呻きながら睨みつけてきた。
俺と丈槍は、問題児と言うか周囲に馴染めない社会不適合者と言うか、そんな括りで仲良くなった不思議な関係だ。これは友人と言える

のだろうか。
「大体ですね、もう三年ですよ、我々は。今更友人を作ってどうしろと」
「最後の一年だからこそ、楽しまないと損よ」
「そうだそうだー」
「どっちの味方だこんにゃろう」
いつの間にか復帰していやがった。もうにこにこ笑顔だ。切り替えの早い奴め。
「それに、友人など作らんでも今を楽しんでますよ」
「う～ん……でも……」
佐倉さんは良い人である。それはもう良い人である。
こうして頭ごなしに否定するのではなく、出来る限り生徒の目線に立って考えようと努力してくれる。そのせいでもっと教師らしくしてください、と他の教師から言われたりやや仲が悪いようであった。苦労しているだろうにこうして俺たちの面倒も見ようとするのは、この人が善人であるからに他ならないだろう。
「分かったわ、うん。今日はここまでにしましょうか」
そう言って佐倉さんは席を立つ。
「まだ次があるんですか」
「また明日ね」
「やる気満々ですね」
「先生だもの」
「なるほど」
この人らしい理由だ。
「じゃあね、めぐねえ！」
「めぐねえじゃなくて、佐倉先生でしょ？」
「はーい」
小さく手を振って、佐倉さんは教室を出て言った。俺も帰ろうかと席を立とうとすると、丈槍に制服の袖を引っ張られた。
「ねえねえ、てるくんて友達いないのー？」
「ええい、その名で呼ぶんじゃあない。俺には吉野照彦と言う良い名

前があるんだ。吉野、もしくは照彦と呼ぶように」
「分かったよてるくん」
「はは、何もわかってないじゃないか」
　思わず笑ってしまった。俺は笑みの少ない硬派な男だと言うのになんたることだ。
「んん、まあいい」
　改めて席を立つ。軽く背伸びをして息を吐いた。
「じゃあな、丈槍。帰り道気を付けるんだぞ？　足元をよく見て歩くが吉だ」
「てるくんは帰らないの？」
「吉野、もしくは照彦だ。厄介なことに先約がある。すまんがまた明日だな」
「そっか、じゃあねー」
　丈槍は飛び上がるように椅子から立つと、良い笑顔を残してミサイルの如く走り去っていった。
「さて」
†
　グラウンドとは運動部の聖域だ。すなわち俺のような人間には全く縁がない場所である。体育の授業で仕方なく使う以外には、その土を踏むことはまずないと言っていい。
　そんなところに俺は足を踏み入れた。
　そこでは今まさに陸上部の奴らが走り回っていた。直視できぬほどに眩しい光景である。
　汗を流し、笑いあい、時には涙を流す。青春そのものであった。
「ん」
　立ち去りたい気持ちを必死に抑え、目当ての男を見つけた。何やら女子の部員と話している様子である。早く話し終わらないかと待っていると、俺の視線に気づいたらしく彼が駆け寄って来た。
「彼女は良かったのか？」
「大丈夫だよ、ちょっと話してただけだからさ」
　彼は俺の友人と言うわけではない。知人と言ったところか。

偶に話すことはあるが、他愛もない世間話位だ。
「ほら、これでいいだろう」
俺は持ってきていた袋を渡した。
中には、以前に彼からもらった買い出しメモに書いてあった通りの物が入っている。
「うん、ありがとう。助かるよ。お金足りた？」
「問題ない。学食一食分だぞ」
「任せてよ」
練習だから、と彼は去って行った。
俺も帰るとしよう。
空は少しずつ暗くなってきていた。
††
正門まで歩いていくと、見覚えのある帽子が目についた。獣の耳のように尖ったあの帽子は、間違いなく丈槍のものであろう。背中を塀に預けてつまらなそうに俯いている。下校する生徒の中で、その姿は浮いていた。周りの生徒も近づこうとしないから、そこだけ周囲から切り離されたようだ。
丈槍は子供っぽい。
高校生ともなるとそれが異常に映る。
異常は人間関係を構築するのに多大な影響を及ぼす。
待っているのは孤立だ。
分かりやすい話だった。
「何をしているこのお馬鹿さん」
俺はゆっくりと近づき、奴の頭にチョップを叩きこんでやった。びくっ、と体が震え、顔を上げた。
「ぁ……てるくん！」
花が咲いたような笑顔だ。先ほどまで悲しそうに下を向いていた奴とは思えん。
「吉野、もしくは照彦だ。……帰らんのか」
「てるくんは？」
「吉野、もしくは照彦な。俺ももう帰る。用も済んだからな」

「じゃあ一緒に帰ろうよ！」
「そうするか」
断る理由もなし、俺たちは一緒に歩き始めた。
こうしていると、俺たちは友人同士のように思えた。今度はこの方向から反論してみよう。
佐倉さんは明日もやる気のようだし、このままだといつまでも続きそうだからな。
「？　なんだか楽しそうだね」
「そうか？　まあ、そうだな」
「ふっふー」
なぜドヤ顔なのか。しかしどうにも微笑ましいこいつに、俺はまた笑みがこぼれる。くやしい。
――こんな日常が何よりも大切だと気づいたのは、それから少し経ってのことだった。

二

部活と言うのは青春への第一歩である。
例え何部であろうと、ある集団に属することは己の見識を広め、輝かしい未来を近づかせる。
だがその一歩を踏み外したものはただ落ちていくのみである。それは学内ヒエラルキーでもあるだろうし、自らの人間性でもあるだろう。しまいには暗くよどんだ空気を内に宿し、楽しげに笑う輩にあらぬ憎しみを向け、男女交際に至った者どもには嫉妬の炎を燃やす、そんなしみったれた学生生活を送る羽目になる。
そうなってしまった戦友を、俺は何度も目にしてきた。そのたびに思った、こうはなるまい、と。
回避するにはどうすればよいか。簡単である。
「周囲と迎合せず己を貫き、何があっても動じない強い精神を持て」
「その言葉好きよね」
「俺のお気に入りだ。真似するなよ？」
「絶対にないから安心して」
放課後の屋上は、一人物思いに耽るのに最適である。今日も世界は平和だぜ、とか、ふう、学生生活も楽じゃあないな、とか、何かそれらしいことをモノローグで語っていると、不思議と落ち着いてしまうのだ。
そんな折に出会ってしまったのが彼女、若狭である。
園芸部である彼女は度々屋上に出没する。その都度姿を隠したり気づかれずに帰ったりしていたのだが、先日運悪く見つかってしまった。彼女は俺と会話しながらも水やりをしたり草を抜いたりとせっせと働いている。こういう小さいことをこつこつとやれる人間は、将来大成するのだろう。俺には到底無理だ。ビッグな男だからな。
「それで、何の話だった？」
「吉野君はなんでここに入り込んだりしたのかって話よ」
「ああ、そうだった」
なんで、と問われると途端に恥ずかしくなってくる。理由などない

も同然である。
と言うかないと答えたほうが格好がつく分なお悪い。
格好良く物思いに耽って気持ちよくなるためです。
端的に言えばこうなのだ。それから逃れるためにいろいろ策を弄し、あの言葉をぶち込んだのである。
「そうだな、一言で表せば精神を成長させていた」
嘘である。
「どういうこと？」
最もな疑問だ。俺も意味が分からん。
「屋上から世界を見渡すことで自らの矮小さを再確認し、今ある悩みやストレスを吹き飛ばすのだ！」
真っ赤な嘘である。
「毎日やってるの？」
「毎日だとも。そうしてこの強靭な精神が育まれたのだ！」
赤が重なりすぎて黒く見えるほどに真っ赤な嘘である。
大体、精神の成長と屋上の景色とでどんな関係があるのかと。何の関係もないわい。
若狭はふーんと気のない返事をして黙り込んでしまった。世話の方に集中し始めたのだろう。
彼女にとってはそこまで興味を惹くような話ではないようであった。こちらにとってもそれはありがたい反応である。これ以上この話を引っ張られようものなら、もう一度あの言葉をぶち込まざるを得ない。
静かな時間が過ぎていく。放課後とはかくあるべし、と言った雰囲気だ。
太陽は地平線の向こうに消えゆこうとしており、その後を追って夜が近づいている。
「ねえ」
不意に若狭が俺を呼んだ。
「何だ？」
「学校、楽しいと思ったことある？」

これは嫌みだろうか。こんなところで暇している時間があったらもっと有意義なことに使え、と言外に言っているのか。それとも手伝え、と言うアピールか。俺は呻く直前になり、何とか受け流した。
「と、突然なんだ？」
「別に深い意味はないわよ？　ちょっと聞いてみただけ」
興味本位と言ったところだろうか。少し安心した。
こちらに顔を見せてくれないから、何を考えているのかいまいち掴めないのが怖いところだ。
「楽しいと思ったことはないな」
「……そう」
「だが、詰まらないと思ったこともないぞ」
そこで若狭は振り向いて俺を見た。意味が分からない、と言いたげな顔だ。
「何かと面倒なこともあるが、かと言って嫌になることもないってことだ。俺の強靭な精神力によるものだがな」
真面目に答えている自分が無性に気恥ずかしくなった。
夕焼けに照らされているから、顔が赤くなっていることは伝わっていないと思いたい。
「ふふ、吉野君て変な人よね」
「む、会ってからそう時は経ってないだろう。変人と認定するには早計ではなかろうか」
すると若狭はくすくすと笑った。口元を手で隠して、上品な仕草である。同い年なのに年上のようだ。
「そういうとこ、普通じゃないわ」
「くっ、堂々と貶すとは、何て奴だ」
にやにやと見つめてきた若狭は、また世話に戻った。言いたいことだけ言っておしまいか。
思ったよりは子供っぽいかもしれない。
お返しに俺もその丸まった背中をにやにやと見てやった。傍から見たら不審者に見えるに違いない。
「――のかしら？」

「ん？」
　くだらないことを考えていたら、何と言ったのか聞き逃してしまった。
「すまん、何て言ったんだ」
「また、来るのかしら、って」
「まあ、迷惑じゃなければな。俺は勝手に使ってるわけで、強く出られた立場じゃあない」
「変人だけれど、常識はあるのね」
「変人は余計だ。……迷惑だったか？」
　少々心配になってしまった。精神は他の追随を許さぬものと自負しているが、人とのコミュニケーション能力が低いことも自負している。そのせいで相手に何かを強いてしまうのは避けたいところだ。
「いいえ。話し相手がいたほうが私も楽しいわ」
「そうか。では、また来てもいいのか？　来たところで景色を見て過ごしているだけだが……」
「好きにしたらいいんじゃない？」
「なるほど。ならばそうさせてもらおう」
　そうこうしていたら、もう太陽は見えなくなって、夜の帳が下りてきた。グラウンドが照明で照らされている。部活に勤しむ連中は、遅くまでご苦労なことだ。あれもまた、俺には真似できん。
　若狭は未だ黙々と作業をしている。俺には何をしているのか分からんが、園芸と言うのもいろいろやることがあるのだろう。そうすると、こう、申し訳なさが湧いてくる。場所だけ使わせてもらって全く手伝わない、と言うのは、人並みの良心を持っている俺には肩身が狭い思いだ。
「ああー……若狭」
「何？」
「何だ、その、えー……」
「いきなり歯切れが悪くなったわね」
　人を手伝う、と言うのは俺のキャラではない。言い出すのが難しいのだ。

「こ、交換条件と行かないか？」
「何と何の？」
「ここを使わせてもらうから、代わりに俺はお前を手伝う……どうだ？」
　すると若狭は立ち上がって振り向いた。にやにやとした笑みが張り付いている。
　俺は失敗を悟った。
「あらあら」
　子供を見るような瞳だ。
「ええい、やめい！　俺をそんな目で見るな！　いいか、俺はお前を手伝うからな！」
「今日はもう終わったわ」
「な、なら次からだ！　分かったか！」
「はいはい。思ったよりも子供っぽいのね？」
　言い返したところで丸め込まれる思いしかせず、俺は口をつぐむことを余儀なくされた。それを見て若狭は更に笑みを深くする。怒るに怒れず、俺は苦笑した。

　――こうした日常は、なくなって初めて価値を知る。